

◆ワンダーランドの目的

はじめて英語を浴びるように聞いて“わかる”経験、そして、真似をしたら“わかってもらえる”経験を重ねて、英語に慣れること、英語で話しかけられてもドキドキしないで、わからない時にはもっと集中して耳を傾けて聞こうとする態度を養うこと、これが、このコースで子どもたちに身につけて欲しいことです。

自分から意識的に学習し、学習内容を整理する能力はまだついていません。この子たちが信頼して、身も心もゆだねている先生に、

外来語を多く使った分かりやすい英語で問いかけられ、

答えやすく誘導してもらい、

お話を聞かせてもらい、

真似をしてお話ができるし、

歌も上手に歌える、と思うと、

字も読めるような気がしてなぞり書きを楽しむ。

英語で言われたのを聞きながら、先生のする通りにすれば、折り紙や工作もできる。

こんな作業を続けて、英語の環境に身を置かせようとするのが、このコースの、目的です。

子どもたちは無意識のうちに英語の音の固まり＝意味の流れに、自然に反応することを覚えます。これこそが、英語のリズムであり、イントネーションです。意味のある音の固まり毎に“わかった”と感じ、身振りや表情で反応しながら“応答”することで、英語の文のきまり＝文法を身体でわかっていくのです。

◆9才は転換期

理屈っぽく、論理的に思考しながら学習しようとする態度がでる10才を前にして、9才はまさに転換期です。未知の価値観に寛容な態度で接することができるのも、8才前後と言われています。新しい言語の体系に臆することなく積極的に飛び込んでいけるのも、9才児までであることを、現場で見してきました。

◆発音やリズムを大切に

子どもたちは日常生活の中に溢れた外来語をしっかり身につけ、使いこなしています。これを正確な英語の音に入れ直しながら、不思議の国“ワンダーランド”の授業は始まります。子どもたちが既にもっているイメージを利用し、英語の語彙を増やししながら、知っている英語、使える英語の量を増やします。

正しい英語の音で言えない英文を、日本語で説明したり（訳したり）、正しく音読できないものを書いたりする前に、発音やリズムやイントネーションを体で感じ取らせましょう。それは、将来英語を使いこなすための基礎となります。今まで私たちが失敗してきた英語教育を改め、生活の道具として英語を聞き、読み、話し、書く能力を高めるために、次代を担う子どもたちが、自信をもって活躍できるように、幼・児童期の英語教育を大切に育てていきたいと思えます。

◆最初の半年

“ワンダーランド”のクラスが始まって半年の間に教えたことを考えてみましょう。英語のルールを理屈で考えようとせず、その背景にある文化を日本のそれとは違うと意識していない子どもたちが、心を開いて英語の世界に飛び込んでくることが出来る雰囲気を作ってあげることが先決です。英語の授業が楽しみ、先生と遊ぶのがおもしろい、と思ってもらえて、しかも、その気持ちが半年続けば、私たちの目標は達せられたと言ってよいでしょう。先生はその間、正しい英語の音の流れを聞かせ続け、英語を使って手作業をしたり、お話を聞かせたり、歌いながら身振り手振りで表現し、ゲームをしたりします。英語を使いながら覚えていくのです。子どもたちが自分で考えたり感じたりしたことを、先生に手伝ってもらいながら英語で表現するように仕向けます。全く泳げなかった子どもが、水を怖がらなくなり、進んで水に顔をつけられるようになった、というところでしょうか。

◆次の一年間の課題

次の一年ぐらいの間に子どもたちは精神的にも大きな成長を遂げます。母語である日本語での表現力が伸び、読みこなす量も増えます。生活行動半径も大きくなり、運動神経も発達し、手先も器用になります。骨格もがっしりとし、筋肉も強くなり、肺活量が増えて発声もしっかりしてきます。この目覚ましい発育の過程に沿って、子どもが無理なく表現できるような教材と教具で、英語を使うことの楽しさを経験させることが、この時期の私たちの課題です。

名詞や形容詞を、ただ暗記するように覚えさせるのではなく、自分で考え、単語を選んで使えるようにします。とんでもない勘違いや間違いを繰り返しながら、身振りや表情で相手に意志を通じさせるおもしろさを経験していきます。

テキストの見開きページいっぱいには広がる絵の中から、今話されているものを見つけ、触ったり、口頭で応答したりし、また、自分でも好きなものを選んで表現します。絵カードをとったり、ジグソーパズルで指示された形を組み合わせて作ったり、ワークシートに色をぬり折り紙を貼って美しく仕上げたり、子どもが自分で手を下して表現できるようにします。

◆注意すべき点

この様な作業の中で、指導するものが注意を怠ってはならない点をいくつか挙げてみます。

- ・子どもに積極的に表現させる。
- ・リズムやイントネーションが正しければ、文法上の誤りや、発音の細かいところの矯正は

無理にしない。

- ・先生が常に正しい英語で、子どもの不完全な英語表現を補ってあげる。
- ・先生自身、子どもと一緒に全身を使って英語で表現することを楽しむ。
- ・ *English in Action Series* の先取りをするのではなく、その準備のために、基本的な力をつける。

◆目を見張る差

一年、或いはそれ以上の年月、子どもたちと *Wonderland Series* の教材を使って英語と付き合うのですが、*Wonderland Series* で英語に触れた子どもたちが *English in Action* の勉強を始めると、英語の音に対する反応の良さに驚かされます。*English in Action* で初めて英語に触れる子どもとの違い、そして、その後の学習での応用発展能力の違いには、目も見張るものがあります。それだけに、*Wonderland Series* の指導法には心を配らなければならないということでしょう。

Welcome to Wonderland Red Book, Blue Book

◆子どもが言語を習得していく脳の働きを刺激する

Red Book (*Welcome to Wonderland Red Book*) と Blue Book (*Welcome to Wonderland Blue Book*) は基本的には同じ考え方と同じ構成で作ってありますが、Red Book の方には、アルファベットの文字あそびに次いで、あいさつなど導入に使いやすい歌が最初の数ページに納められています。

この時期の子どもたちは、極めて自然に、聞こえてきた音に対してそのまま反応することができます。聞こえた通りに音を吸収し、真似をする活動を続けていると、先生や CD の英語の音の流れの中にルールを発見し、自分でも使ってみようとし、その時に、見つけたルールを過剰に当てはめて間違えることがあります。I have a two books.などがその例です。積極的な子どもほど発言しようとし、間違いも多くなります。でも、この子たちは間違えながらも沢山聞いて、自分のルールを修正しようとし、先生は慌てて間違いを訂正しないでいただきたいのです。発表したことを大いに誉めて、そっと誤りを言い直して、正しい英語を聞かせてあげましょう。この様に無理なく自然に新しい言語に触れていくと、自力で習得していく能力が、幼児期には生まれつき備わっていると言われます。その能力を LAD (言語習得装置) と呼ぶ研究者もいます。この“装置”を、この 2 冊の本で遊んでいる間に、大いに刺激したいと考えています。

◆外来語を活用

Red Book の表紙を広げて見てください。指で示しながら、ちょっと英語らしく気取って、“ピーターパン” “ハナサカジーサーン” “メアリーポピンズ” と言っていくと、英語を使っているという意識をせずに、英語の世界に入り込んでしまいます。この他にも、コアラ、ドア、アップル、サンタクロースなど、次々に子どもたちが外来語として既に知っている単語が用意しており、それを見つけさえすれば英

語を使っている気分になれます。

Red Book のアルファベットの見開きページも、じっくり見て、子どもたちに知っている単語を探させてみます。そして、子どもたちが知っていると言った単語を使って、先生が話しかけ、子どもの表情で理解の様子を判断しながら授業を進めていきます。

この方法は、“お人形の家”や歌やライムのページでも、赤頭巾ちゃんのお話でも双六でも、どれも皆同じです。先生が語りかける文を色やサイズや数の単語を入れ替えたり、好きか嫌いか、持っているかいないか、出来るか出来ないか、どこにあるのか、見えるか見えないか、などを話し合ったりしていきます。

先生や CD の真似をすることは大好きでも、子どもたちの方から主体的な発話は限られていると思います。無理して自力で言わせようとして、日本語訛りの音を繰り返し練習して時間を費やすよりは、正しい音をたくさん聞かせることに専念したいと思います。そのうちに必ず LAD が働いて自己修正していくはずです。

◆自己修正を援助

Blue Book でも同じ様な方法で授業を続けます。但し、子どもたちは英語で話しかけられることに慣れてきますから、問いかげに応答するスピードも早くなるでしょう。“Yes.” “No.” という簡単な応答をするときには、自信のある大きな声が出るようになっていきます。歌声もしっかりしてきて、子音や母音の発音も明瞭になっていると思います。この時こそ、CD の音のリズムやイントネーションを細かいところまで聞き取って、上手に自己修正ができるように、子どもたちの気持ちを支え、励ましてあげたいものです。

だんだん複雑なゲームもできるでしょう。ゲームの中で、子どもたちは我を忘れて英語を使ってしまいます。その英語は、文型練習をさせる時と比べて、不思議なくらい自然な音の流れを持っています。ゲームが英語の習得に役立つようにお膳立てをしましょう。

◆英語力向上に努力を

この様な授業をするために、先生は自分の英語力を向上させる必要があります。教室での語りかけのモデルになる様にモデルとなる音源を収録した CD を作りましたので、先ず先生が CD を聞いて真似をし、練習してください。各音素や英語独特の音の流れを、子どもが聞き取りやすい様に、ゆっくり吹き込んであります。これは、赤ちゃんに母親が語りかける時と同じで、第二言語を教える時に大切な技術です。

もう一つ心に留めておきたいのは、周囲の大人の態度です。日頃から保護者との連絡を密にし、授業の手法を説明すると共に子どもたちの変化を伝えておきましょう。

Blue Book の最後のページで、蟻さんと一緒にアルファベットが読めれば、文字が多い次のテキストへの準備ができたこととなります。

English in Wonderland Green Book

◆土台作りの一年

ぼーぐなんの教材の中で Green Book と呼んでいる *English in Wonderland* はどのような位置を占めているのでしょうか。この本で英語を学習する子どもたちには、大別して3つのグループがあります。

- ① *Welcome to Wonderland* の Red Book と Blue Book の2冊を使って、2年ないし3年間英語に触れてきたもの
- ② Red Book を用いて、一年余り英語に触れてきたもの
- ③ Green Book ではじめて英語に触れようとしているもの

この様に、異なる条件で英語学習を継続、或いは開始する子どもたちは、この Green Book を使う一年ほどの間に楽しい雰囲気の中で英語が使われる中に身体ごと浸りながら、児童期の総合的な英語学習を目指す *English in Action* コースの土台作りをいたします。

◆9才前後の特徴

Red Book や Blue Book で、子どもたちは自然な英語の音の流れの中に身をおいて、楽しく遊びながら英語独得のイントネーションやリズムを体得するように指導されます。子どもたちが興味を持つテーマを中心に、7、8才位までの精神発達に合ったカリキュラムで、レッスンが進行していきます。

Green Book に移る9才前後の子どもたちは、小学校では3年生から4年生になる頃ですが、英語の様な音声習得面だけでなく、いろいろな学科の学習でも、周囲の大人たちを驚かせるほどの成長ぶりを見せてくれます。子どもっぽい体つきは残っているものの、運動機能も高まり、自我も確立してきて論理的な思考が強くなってきます。この精神的な発達、音声面の習得にはマイナスに働きはじめることがあります。指導には注意を要します。特に、この Green Book ではじめて英語と出会う子どもたちは、急激な変化の時期にさしかかっているため、英語との触れ方や音声の習得の方法などが①、②のグループの子どもたちとは違いますから、特別な心遣いをお願いしたいと思います。

◆Green Book (*English in Wonderland*)で何を指導するのか

Green Book を手にして気がつかれる様に、語彙が増え、しかも、カテゴリー別に分けてあります。文字も意識的に入っており、自然に認識しやすくなっています。しかし、*English in Action* の様に句型中心ではありません。句型を覚えさせようとするよりも、多くの日常必要な語彙を酷使して英語が使われている状況に慣れ、英語を使う経験を積み重ねられる様にしてあります。補助教材（後で説明）を大いに活用し、英語による意志の伝達を多量に経験させることが指導の中心になります。

行動半径が広がり、社会生活の経験も豊かになってきた子どもたちは、身の廻りの生活語彙が日本語でも増えています。そして、それを意識的に整理し、理解し、論理的に思考を発展させていくこともできるようになっています。この学習行動を利用して、英語の語彙も整理し、生活に即した英語表現を、音の固まりとして使いながら教えていきます。「日常のあいさつ」「身の廻りの生活用語」「曜日や月の言

い方」「動作動詞」などを使われている状況の中で、繰り返し経験させ、子どもたち自身も使って表現できるように仕向けます。

◆リズム等も更に強化

それと同時に、Red Book や Blue Book で重視してきたイントネーションやリズムを、更に強化するために、ナーサリー・ライムや手遊びなどを取りいれました。大人になることを目指して背伸びを続ける子どもたちが、抵抗なく英語の音を受け入れられる様に、指導には心くばりをしながら授業を進めていきたいと思ひます。

この年頃になると、こちらが期待する以上に、子どもたちが文字を無意識のうちに認識しているのに気づかれると思ひます。音源の CD や先生が読むのを聞いて、どこの、どの文字群を読んでいるのか、結構わかっていて、目で追っています。それだけに、Green Book の絵には英語の文字が多くなっています。英語独得の音が定着しないうちに読ませたりするのは、日本語訛りのある英語音になるので 望ましくありませんが、子どもたちが、“読める” 喜びを発見した時には、上手に励ましてあげたいものです。文字を書く練習は、ワークシートにあるものだけで十分です。もし、それ以上のゆとりがあれば、その時間に正しい音の習得に専念してほしいと思ひます。

◆English in Action Series に向けて

Green Book との一年間を含む *Wonderland* コースを終わる頃、子どもたちは、表紙の絵にある不思議の国“ワンダーランド”のお城を通り抜け、裏表紙の絵にある様に、世界の人々と手をつなぎ、友情の輪をひろげる自信をつけていることでしょう。はっきりした、明るい声で表現することに慣れていると、*English in Action Series* のテキストとワークブックを中心にした文型練習の多い学習方法にも、上手についてきてくれると思ひます。表現する内容を、モノクロではなく、カラーのイメージでしっかり捉えながら言えるようになるでしょう。英語を使う量が多い学習方法を身につけた子どもたちは、将来の英語学習にも積極的に対応していけるはずです。

副教材

◆副教材の種類

English in Wonderland & Welcome to Wonderland Series には、

- ①ワーク・シート 56 枚
- ②ABCカード
- ③ビンゴ・カード
- ④マッチング・カード
- ⑤カウンティング・カード
- ⑥ジグソー・パズル

の副教材があります。子どもたちはどんどん成長します。同じ教材でも、子どもの年齢により扱い方も変化させなければなりません。常に子どもの目の高さに合わせて判断し、教材を“料理”していききたいものです。

◆副教材の目的

副教材は、テキストと違い CD はありません。先生が、英語で話しかけ、絵や実物、ジェスチャーを使って聞かせ、子どもたちに“わかった！”という感触を与えていく、従って、英語だけで先生と子どもとの間にコミュニケーションが成立し、簡単な作業を完成させていく、その手段として副教材を利用していただきたいのです。

ワーク・シートの色ぬりをしたり、ジグソーパズルのピースをはめられるようになっていたり、カードを上手に言えるようになることは目的ではありません。色塗りができなければ、“can't”を使って話し合っしてほしいし、ピースをはめることよりは、切れ切れになった細かい絵について Q&A をしながら、長い時間英語を使っていることに慣れさせてほしいのです。子どもが乏しい英語力で推理しながら、英語でも話が“わかり”、自分も“わかってもらえる”という自信をつけていくための道具として、副教材を活用してください。

◆ワーク・シート

56 枚のワーク・シート（※注：現在は、出席表も含めて計 59 枚です）では、いろいろなテーマを扱っています。子どもたちの日常の生活経験を基に、なるべくたくさん情報を盛り込んだ絵で、子どもたちがわかることを表現できるようにしてあります。話題を提供する糸口が絵になっているので、色をぬり、絵を描き込み、折り紙を作りながら、話を発展させていってください。そのためには、同じものを同じ色にぬらせたりせず、ひとりひとりの子どもの個性を活かし、好きな色、好きなサイズ、好きな形を選ばせて作業をさせます。そうすると、作業中や作業後に、自分のワーク・シートについて表現するとき実感がかもり、英語の表現も生き活きとしてきます。限られた英語の運用力でも、それなりに自分で考え、自力で発表させることで、学習した英語が定着していきます。

◆カード類

いろいろな年齢のクラスの子どもたちと使い続けることによって、英語学習を助けてくれるカードの利用法を発見していってくださることと思います。おもしろいけれど時間がかかり過ぎる、ゲームとしてはあっさりしているけれども文型の定着には能率的、いいけれど子どもが興奮してしまう、何度繰り返しても飽きない、すばらしい集中力をみせる等など、カードのゲームには汲み尽くせない奥行き深いものがあります。私自身、いまだに新しい使い方をみつけ、はしゃぎながら遊ぶ子どもの傍で、その次を考えたりしています。

◆ジグソー・パズル

40 ピースをバラバラにする前に、子どもたちと英語の Q&A をしながら、ずいぶん楽しめるはず。そして、バラバラにした後でも、使いこなして飽きるまでには、数え切れない程何種類ものゲームが考えられるでしょう。

子どもたちは英語を使っているという意識がなく、思わず英語を口にしてしまう状態になります。そんな時の英語は決して完全で正確なものではありませんが、イントネーションやリズムは不思議なことにとっても自然です。それは、伝えようとする意味が明確で、その単語をしっかり発音しようとするからでしょう。

この様な授業の積み重ねで習慣づけられた、英語を使おうとする態度が、次の *English in Action Series*、さらには社会に巣立ち英語を使う時にどれ程役に立つことか、容易に想像できます。

ところが、家で子どもの帰りを待ち構えているお母さまたちの反応は油断なりません。「何をしてきたの。ま、ぬりえを！」この非難がましい声の響きは、子どものふくらんだ英語学習意欲を一度にしぼませ、何か悪いことをしてきた様な気分させてしまいます。現在の英語習得の理論をふまえて、じっくり説明してあげられる心の準備も必要でしょう。私たちは笑顔を絶やさず、がんばりましょう。